

そこでも「罪の赦し」「信仰による救い」は最後まで失われることなくわたしたちにささやかれている主の言葉です。それは甘やかされるのでもなく、大目に見てくれるようなものでもありません。ただその方が真剣に向き合ってくれるものでなければならぬ。そしてまさに神は向き合ってくださって赦しと救いを与えてくださったのです。

人はミノムシのように、ようやく自分を覆う壊れやすい材料を綴り合せて人生を造っています。それがとられ失われて自分があからさまになることは恐ろしいことです。さらには、人生そのものもつまらないもので、残るものがないことがばれ、それが明るみに出されることを恐れます。

結局人は空しさが暴かれることと、その結末の死を恐れます。人は滅びる。しかし聖書は滅びることのない主の言葉をわたしたちにもたらしたのです。

罪の赦しと信仰に生きることとは決して奪い取られようのないことです。

主イエスは「体は殺しても、魂を殺すことのできない者どもを恐れるな。むしろ、魂も体も地獄で滅ぼすことのできる方を恐れなさい。」(一〇章二八節)と言われます。滅びるものに支配されているために、恐れを忘れることがあります。滅びることに慣れ、意識しなくなっている。自分の死を忘れるのです。「汝、死すべきものであることを忘れるな」というのは古くからの教会の言葉です。死を忘れてはしっかりと生きた生き方はできないのです。

主はの中で恐れるべきものを教えます。最も恐れるべき存在は体を殺すものではなく

て、体も魂も、滅ぼすことのできる方だ。

「二羽の雀が一アサリオンで売られているではないか。だが、その一羽さえ、あなたがたの父のお許しがなければ、地に落ちることはない。あなたがたの髪の毛までも一本残らず数えられている。だから、恐れるな。あなたがたは、たくさんの雀よりもはるかにまさっている。」(二九〇三三節)と言われます。

その方は雀の命を保持し、髪の毛さえ数えられる方だ。わたしたちが恐れるということとは、そのお方の支配を受け入れることです。それが、恐れることなく生きることになるのです。

神を恐れることは自分を神の前に立たせることです。すべてを見抜かれ、ごまかしの効かないお方です。しかし、わたしたちはその方を恐れ、その前で、その方を信じていることができます。主イエスを遣わしてくださったのです。十字架の死により罪を赦し、復活によって、死への勝利をお与えくださったことを信じ、信頼することができます。

ペトロは「思慮深くふるまい、身を慎んで、よく祈りなさい」(一ペトロ四章七節)と言います。恐れることのないものの姿です。

預言者イザヤは「イスラエルの聖なる方／わが主なる神は、こう言われた。『お前たちは、立ち帰って／静かにしているならば救われる。安らかに信頼していることにこそ力がある』と。しかし、お前たちはそれを望まなかった。」(イザヤ三〇章一五節)と告げます。これは国の存亡の危機の時のことでした。イザヤは「静かにしているならば救われる」と言います。真に恐れるべきものを知っているからです。

(九月四日 共同礼拝)